

アッシジ刺繍の表現方法とデザインについて

井 上 拓 子

序 論

アッシジ刺繍は区限刺繍の一種であり、特定した布目（2～3目）を正確にカウントして行くホルベイン・ステッチとクロス・ステッチを用いた独特の刺繍である。対象的な対の動物画（聖獣模様）をメインにモチーフにし、背景を唐草模様などの細線細工で囲んでいる。デザインと技法は共に中世イタリアの伝統に基づいている。近隣に住む女性達の手によって絶える事なく創作されている。近年、国内外の観光客の増加に共いアッシジ刺繍製品の商業化にも成功を納めている。アッシジの女性達は常に小さな布を携帯し仕事の合間をぬっては作業し、母親達は子供の為に服装に繡いをほどこしている。

生活に密着している工芸である事を見聞した。

アッシジの町と聖フランチェスコ

アッシジ（ローマ語アシジウム中世ではアシェジ）はイタリアの中部ウンブリア地方に位置している。伝説ではトロイの皇子「アジオ」（アジオの権力下のスプ・アジオの名に由来している）が創立された事になっている。この地方は起伏のある盆地で形成され、豊かな牧草地が広がり「緑のウンブリア」と呼ばれている。

アッシジは現在でも農業に頼って、手芸品と観光業で成り立っている。

アッシジの町は聖フランチェスコ（1181年～1226年）の生誕地として世界的に有名である。彼は裕福な毛織物商人の息子であったが、自ら「謙遜従順・愛・清品」を实践した人生を送った。この時代の教会は崇高なものに他ならず、司教も力をもった支配者で裕福で華麗な暮らしをしていた。その時代に貧困を説き、托鉢修道会のフランチェスコ教会を創立した。修道僧達は麻の袋地（アッシュ）茶色の頭巾付きの外衣にベルトとなる紐だけを纏っていた。

彼らの人生に対する姿勢は後悔ではなく神に仕える喜びからなっていた。



図1 地図



図2 アッシュ

注：実際聖フランチェスコが身につけていた物



写真① アッシジの風景

アッシジ刺繍について

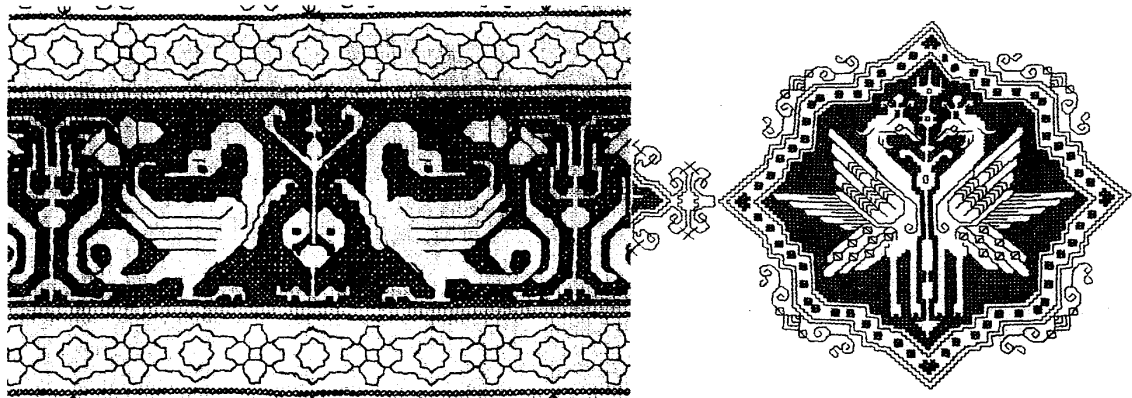
1861年イタリアで新しい国家が創立され、当時の貴族女性達の愛国心から伝統的な手芸を甦らせる運動が起った。1870年ベニスに近いブラノの町でこの運動が発展し、アッシジでは1902年10月4日「聖フランチェスコの日」に市内にある聖アン女子修道院から町に住む貧しい女性の為に手芸講習会を発足させた。他の市と同様、経済的な考慮で政治的な力も働きこの運動を推進させて行った。女子修道院にあった研修所での仕事はすぐに家庭内産業として地域中に発展し、またイタリア国内だけでなく、ヨーロッパ全土そして海外へも急速に広まり、イタリア刺繍はすぐにアッシジ刺繍として認められる様になった。

アッシジには世俗的な習慣はなく宗教の町であり、町の教会が保存している13・14世紀の古刺繍や伝承物（建造物）がデザインの元になっている。

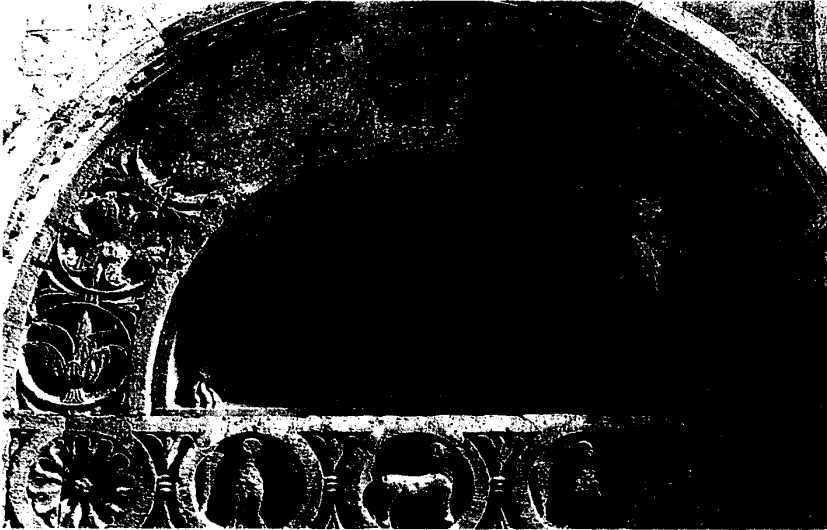
図案となるモチーフは装飾的な木箱の彫刻や聖歌隊席や椅子、聖獣文様などアッシジの町でみかける物のデザインを単純化し輪郭線を描いて行った。アッシジのデザインは対称的である為、生地は縦糸と横糸は同じ間郭・厚さの均一のものが好ましい。

アッシジ刺繍の特徴は2つあり、1つは刺繍技法がシンプルでホルベイン・ステッチとクロス・ステッチの2種類の区限刺繍である事。もう一つは他の宗教刺繍と異なり、絹地絹糸を使用せず麻布に綿糸を使っている事である。現在ではDMC社のSpecial qualityが生地の厚さに合う為使用される。材料の手軽さからいってもアッシジ刺繍製品の商品化が現在も衰えず続く理由の一つといえる。

色にも条件があり、布地は白地もしくは無地のリネンで行われ、使用する糸も2色である（2色対比）伝統的な色は赤・青・緑・金である。通常、メインの文様をホルベイン・ステッチ、黒糸で刺繍する。そのバックをクロス・ステッチで彩色している。（糸色）2色の単調な



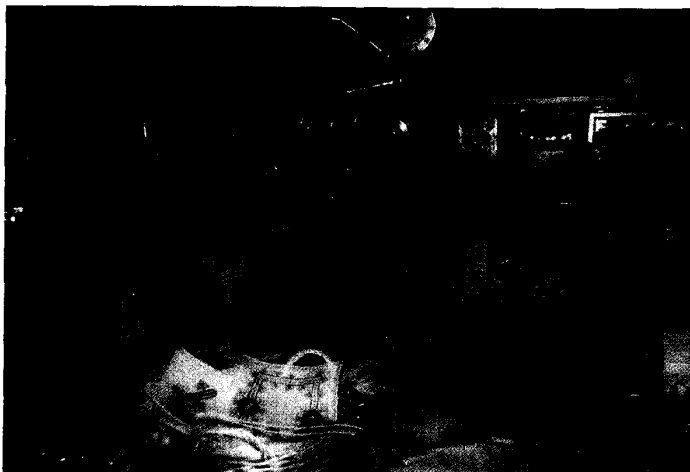
アッシジ刺繍



写真④ ドア・アーチ



写真⑤ ホルン



写真⑥ アッシジ土産屋



写真⑦ ウィンドウ・ディスプレイ

(写真⑥注：サンフランチェスコ寺院迄の坂道に並ぶ土産屋女主人自ら刺繍する。)

(写真⑦注：ウィンドーにアッシジ刺繍のテーブルクロス高価で50万円前後する)



写真⑧ ジョット画「小鳥への説教」

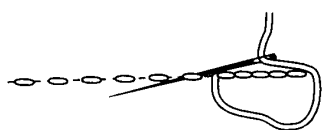
刺繍と思われるが、糸の本数の調節により、1本どりでは繊細で軽快なリズム感が表現出来、また、数本束ねてステッチすると重厚性が増し、気韻といった精神性までも表現する事が出来る。

アッシジ刺繍のデザインに鳥のモチーフ（有羽動物・架空動物）が最も多く取り入れられている。これは聖フランチェスコの考えが女性達の指示を得、デザインに起用されたと考えられる。ジョット画の「鳥への説教」はアッシジで最も有名なフレスコ画であるし、聖フランチェスコ自身、しばしば動物を引き連れ、助けを必要とする物を救済し、全ての生物を兄弟の様に慈しみ親しんだという伝説を残している。今回の習作も彼に敬意を払い刺繍した。

デザインの構成

アッシジ刺繍の特徴・刺繍技術・伝統モチーフを今日に至るまで受け継ぐ為に3つの基本的なモデルを考案した。

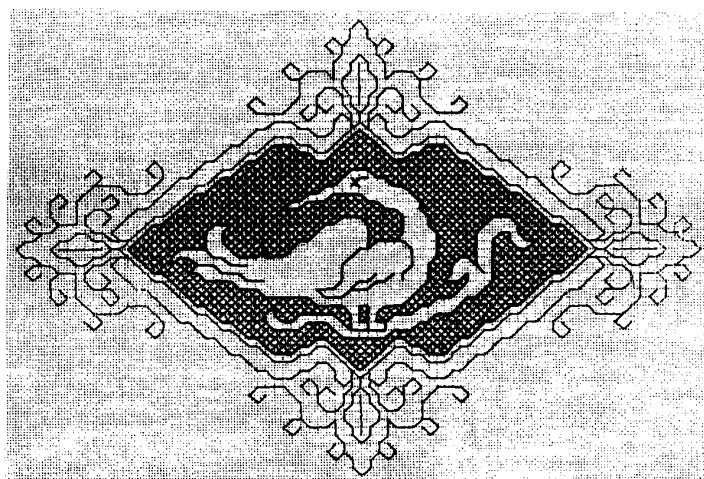
- ① 円形のメダル模様（メイン）
- ② 装飾された縁取り（ボーダー）



図③ メダル



図④ ポーター



図⑤ コーナー

③ 唐草模様の飾り縁 (コーナー)

それぞれバリエーションを持つ事が出来、さらに様々なモチーフを含み、布の大きさ種類に合わせてサイズの変更も可能である。

オリジナルデザインは1902年の物から考察すると聖獣模様・グロテスク意匠・唐草模様アラベスク模様など宗教を象徴したものがモチーフとされている。

空想的怪物

サテュロス・グリフォン・キマイラ・トリトン

人物

プット・ケルビス

動物

各種鳥・馬・山羊・獅子・ドルフィン・魚

植物

果物・花緑・唐草

人工物

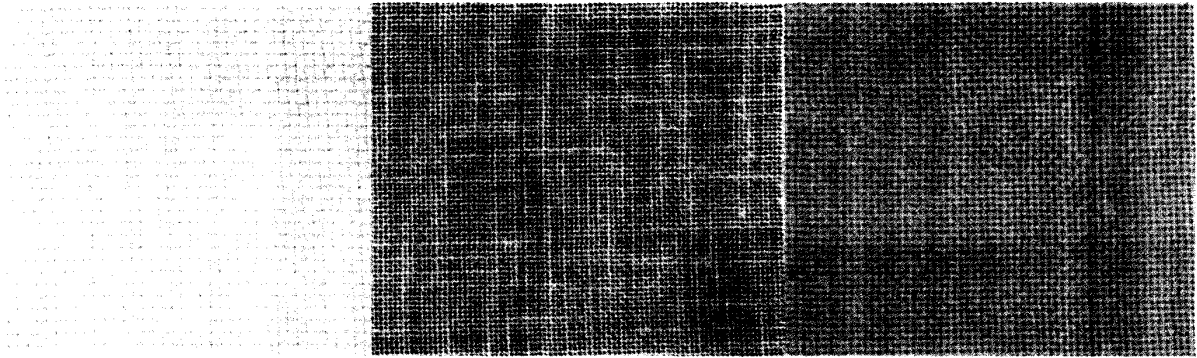
燭台・壺・バルダッキー

それぞれ目的に合わせて組み合わされる。

材 料

布—インディアン・クロス (6×7)

糸—DMC#25 (No.310) (No.350) (No.751) metallic スパン糸 (No.40)



写真⑨ インディアンクロス

写真⑩ ダブリン

写真⑪ コンGRES

用具

針—クロス・ステッチ用No.3・4

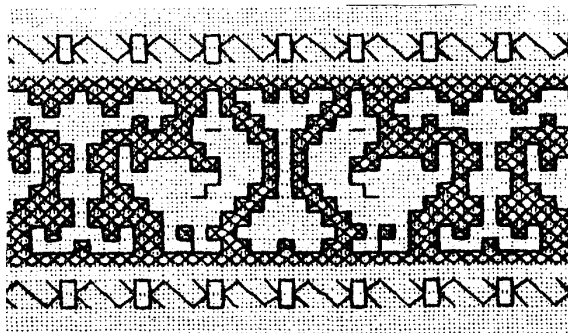
小狭・联系アッシジ刺繍に応用可能な布地

写真⑨今回の習作で使用したもの

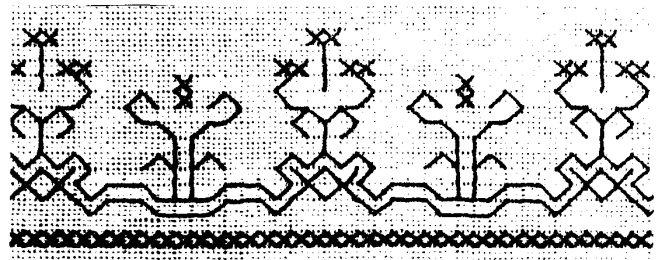
〳 ⑩アッシジ地方で現在使用されているもの

〳 ⑪応用出来るもの

技法



図⑥



図⑦

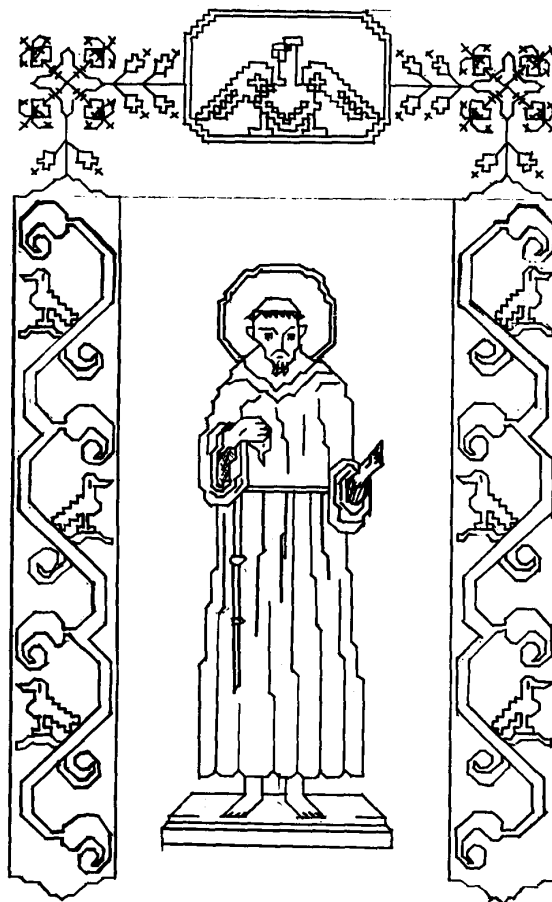
図⑥輪郭をとるホルベイン・ステッチ

〳 ⑦バックを埋るクロス・ステッチ

図案



写真⑫ 制作刺繡



図⑥ 制図

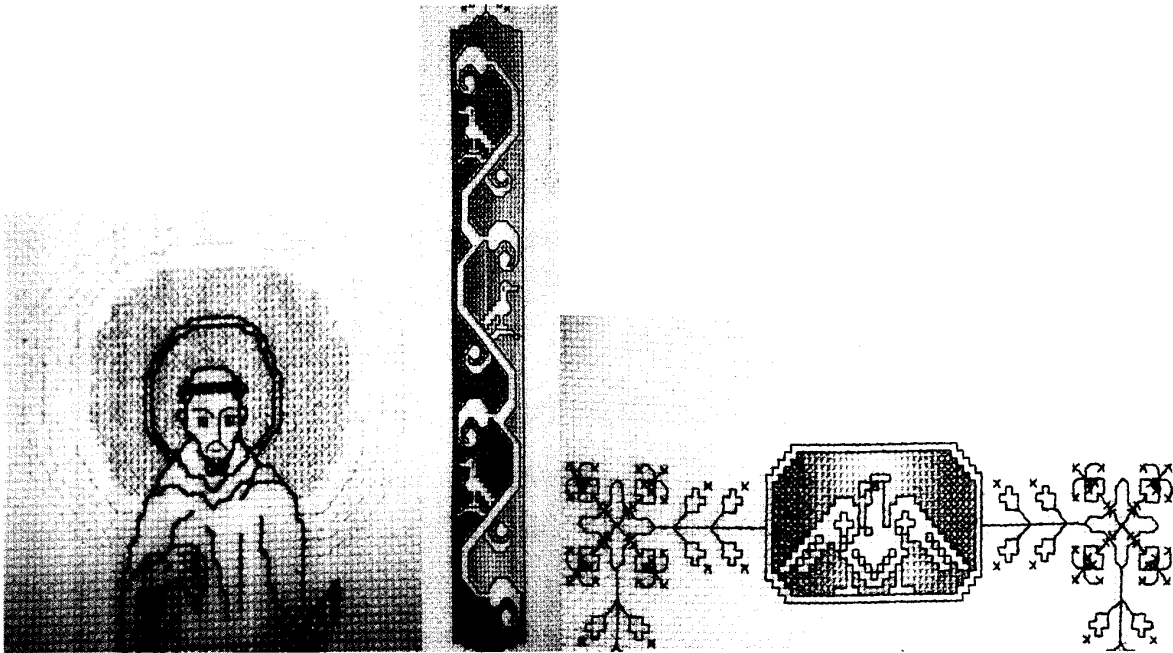
制作方法

—準備—

- ① インディアン・クロス (30×50c) の周囲をブランケット・ステッチでほつれ止めをする。
- ② 布の中心を十字に10目間隔の糸印をする。

—手順—

- ① ホルベイン・ステッチでフランチェスコ像を黒糸 (No.310) 2本どりでステッチする。
- ② 袖口を1本どりのクロス・ステッチで影をつける。
- ③ フランチェスコ像から左右に20目放し、鳥の飾り縁 (ボーダー) をホルベイン・ステッチで刺す。黒1本どりで



写真⑬ メイン

写真⑭
ボーダー

写真⑮ コーナー

- ④ ③のステッチの後、波状唐草模様を境に2色のクロス・ステッチをする。内側青 (No.751) 変り糸、外側赤 (No.350) 各1本どり
- ⑤ 天蓋の羽根を広げた鷺のモチーフをホルベイン・ステッチする。黒1本どり
- ⑥ ⑤の左右対称に鏡像の連続した細線 (コーナー) をホルベイン・ステッチする。
- ⑦ ⑤の鷺のモチーフの中を (No.751) 青でクロス・ステッチする。
- ⑧ 頭上の光輪を玉虫色のスパン糸で円形にクロス・ステッチする。
- ⑨ ⑧の周囲を光が輝く様ホルベイン・ステッチする。
- ⑩ 聖フランチェスコの顔を黒1本どりでステッチする。

考 察

今回の習作では宗教的シンボルをモチーフに使用し図案構成したが、伝統的な聖獣模様とサンフランチェスコ像の組み合わせで韻律づけながら古典的調和をとる事が出来た。

ボーダー (鳥の飾り縁) は中央の波状唐草の幹を境に内側を青の変り糸でクロスSし、清流の清らかさを表現し、外側を赤のクロスSで溢れる生命力を表現した。

この2色の融合により繁茂する草木のなかで小鳥が戯れる様形容できた。

(コーナー) 天蓋の四角形の部分は軽快さを持たせる為、青の変り糸をし、糸の特性を生

かし中央を淡く、外を濃くして図案を立体的にみせる工夫をした。

光輪の部分は聖フランチェスコ像に後光がさす様な幽玄さを表現し、全体を引きしめ、重厚性が増した。

従来素材と異なるインディアン・クロスを使用する事で、平織布より布目をカウントしやすく、図案のミスを解消する事が出来ると共に、様々なゲージの布地に応用する事が出来る事を再確認した。また布地が肉厚の為刺繍した図柄を立体的に表現出来る事が最大の利点といえる。

従来アッシジ刺繍と比較した、今回の習作の相違点は配色の数である。通常2色対比で作製する事が定められているが、今回は規則に捕われず4色、配色し、抽象的なデザインに華やかさが加わり、厳格で優美な装飾効果を上げる事が出来た。そして輪郭の際立ったものでクロス・ステッチのデザインであればどの様なものでもアッシジ刺繍に応用出来る事を確認した。また、図案の組み合わせや色彩の変化で表現方法の無限の展開が可能である。そして、あらゆる装用品に利用出来る、万能な伝統刺繍である事を確信した。

これらをふまえ、作品制作と研究に更に、努力をしたい。

今回の紀要にあたり本学教授桜井 映乙子先生にご指導頂き深く感謝致します。

参考文献

Assisi Embroidery Eva Maria Leszner社

Punto Assisi EDITRICE MINERVA社

ヨーロッパの文様 小学館

ジョット 東京書籍

アッシジの聖フランチェスコ ドン・ボスコ社

「欧風刺繍」 桜井 映乙子著

(本学助手)